

「アガデ (アツカード) の gur」について

中原与茂九郎

(1)

故アントン・ダイメル教授は南部メソポタミアのファラ(古のシュルツパーク)やテルロー(古のラガシュ)から出土した、都市国家時代の初期から末期にかけての時期の経済文書から、穀物の容量すなわち量目を解明された。全教授の研究によると、都市国家時代の穀物などの量目の単位はグル gur とウル ul(シラ sila₃)とであった。ダイメル教授は

- (1) 1gur 1ul = 36 sila₃,
- (2) 1gur 2-ul = 72 sila₃,
- (3) 1gur-sag-gál = 144 sila₃,
- (4) 1gur-mah = 8ul = 288 sila₃,

の四種のグルが都市国家時代に使用されたことを明かにされた。(1 sila₃ = 0.842リットル)そしてシュルツパークでは(1)と(4)とが、ラガシュのウルガギナ時代には(2)と(3)とが使用されたことを明かにされた。

次にしばらくダイメル教授の考察のあとをたどって見よう。

ダイメル教授は「ファラ出土の経済文書」第三巻の第五五泥章の数字を取り挙げられた。この泥章は 37ブル9イクの畑の大麥の種子の数量を記録した文書である。次のような数字が記録されている。

ODG } se gur-mah 大きい貯蔵庫

DDD } se gur } ガムガムの貯蔵庫。
DDD } } 大麥の種子。

合計 8D se gur-mah とある。大麥の数量の記号を計算すれば、もし

$$D = GG = 4ul$$

とすれば D = 8ul となり合計 21gur-mah と一致する。ダイメルは 1gur-mah = 8ul の数値を得た。

次にダイメルは第65泥章の数字を取り挙げた。この泥章は6組に分類された6名の監督 ugula と 104名の勞務者 dumu-dumu 合計110名の勞務者 dumu-dumu に分配された大麥の配給表である。監督には各自に D つつ、勞務者には各々 G D つつ、合計は ODDDDD DDD D D D gur-mah であった。

$$6 \times \frac{1}{2} + 104 \times 2 \frac{2}{3} ul = 3(gur-mah) + 277 \frac{1}{3} ul$$

と計算した。277 $\frac{1}{3}$ ul を gur-mah に換算すれば 277 $\frac{1}{3}$ (ul) ÷ 8 (ul) = 34 $\frac{1}{2}$ gur-mah と 1 $\frac{1}{3}$ ul になる。各人に分配された大麥の配給量は 3 + 34 $\frac{1}{2}$ gur-mah と 1 $\frac{1}{3}$ ul となる。1 $\frac{1}{3}$ ul を gur-mah (= 8ul) に換算すれば $\frac{1}{8} + \frac{1}{24}$ gur-mah となる。

すなわち大麥の配給量は 37 + $\frac{1}{2} + \frac{1}{8} + \frac{1}{24}$

𒍪 = 40 sila₃, 𒍫 = 30 sila₃, 𒍬 = 20 sila₃, 𒍭 = 10 sila₃ の容量をもつ「王のグル」gur-lugal は従来は二代王シュルギの制定したものと考えられてきたが、ウル・ナム法典の前文の記録から見れば、ウル・ナムの時に制定されたとも考えられる。それはともかくウル第三王朝時代の実証記録の量目の数字は gur-lugal に統一されている。而してその容量はウル王が新しく制定したものでなく、アッカド王朝(2350~2150B.

C.) の gur A-ga-de^{ki} を踏襲したものであると見ねばならない。アッカド王朝時代には「アッカドのグル」の外に地方地方によって都市国家時代(5000~2350B.C.)に使用されていた量目も併用されていた。しかるにウル第三王朝の君主が地方的量目を廢止して gur-lugal に一本化したことはウル第三王朝の集権的統一政策の一つの具体的な表現と解されるであろう。

-1960.11.-

いわゆるラガシュ文書の一、二の問題点について

山 本 茂

筆者はさきに、ラガシュ古王国のウルカギナ時代の社会組織について、少しく検討してみた。^(註)ところが、その際、紙数の都合もあって、社会史的検討を行なった経済文書そのものが、そのような検討の基礎として、果たして信頼しうるものか、どうかについては、ほとんど触れないうちに終わった。そこで、本稿では、この問題について感じたことを、一、二、書きとめておきたいと思う。

(1) 文書の合理性について

まず第一に、細部にわたって分析するには、此の4500年以前のタブレットの記載が、今日の我々から見ても理解できる合理性をもっていることが前提となる。ところが、経済文書のなかには、かなり理解に苦しむタブレットも少くない。筆者がこれまで社会史的検討の手がかり

りとしてきた、ラガシュのバウ神殿の大麥給付表(še-ba)は、シュメール経済文書のなかでは、最も形式も整い、かつ規模も大きく、純粹の会計記録として、理解しやすく、詳細な人名・職名による分析に耐えうるものである。しかし、このše-ba表のなかにも、難解な部分がある。特にラガシュ国の支配者の子供達の支配下にある人々に対する大麥給付表、še-ba lu₂ TUR·TUR-la-ne' は難解である。なかには、一見したところ、合理的な解釈を許さないように見える箇所さえある。しかし、一見非合理的にみえても、仔細に検討してみれば、シュメール人書記のとった、独自の省略的記載法の根拠も理解できなくはない。問題は、我々にとって難解であるに過ぎぬのか、あるいは文書の記載自体に法則性がないのかにある。した